歌

君

金井に

領光君

作 作 Ж 詇

悠遠き日 吾は来たりぬ にあこがれて

美る は やは らかき緑 しき小川の畔 の芝生 北たぐに

ロ の 詩 た

があるとこ

新らしき喜びに満つ 清明の森蔭深く訪ね来てせいめい もりかげふか たず き

、なむ石狩の

雄ぉ 大ほ 曠野に いなる先人が 打建てし 足跡と

星辰清きエルムの学園に甦へりたる光栄あれ伝統の法燈四十三回記念祭巡りて

壁の音は高な

らい鳴るない

夢にけむ あ かつきは ň ŋ

0)

雪解なる陵に 二春を魂の故郷に契りては 花香る青史の光栄よ 恋ひ慕ふ意気と血汐 のぼりて

, の

培はん尊き遺訓

久遠の山河 青春の高遠き理想を抱きては恵むなり真理の秘奥 悠久の時の移ろひゆうきゅう 森蔭に心情は燃えてもりかげ、こころ 仰ぎ見よ秀でたる しかる道

進まなむ厳